

工業開発や産業開発に伴いローマなどの大都市への集中が進んだ。当時のイタリアの都市では、「大きいことは良いこと」と考え、都市の周辺を開発し拡大する政策をとった。

1970年代に入って急速な工業化の「つけ」がまわってきた。経済は破綻し、ストライキが多発。またテロが横行するなど治安は悪くなり、各地で都市問題も発生した。「水の都」と呼ばれるベネチア<sup>3</sup>では、工業用水のために大量の地下水を汲み上げたことで水没の危機にみまわれ、また、大気汚染のために亜硫酸ガスが大理石を蝕んで、教会などの彫刻が落下することもあった。

イタリア半島の中央部に位置し、古代ローマ以来の都市の歴史を持つボローニヤ<sup>4</sup>でも、1960年代まで人口が集中・拡大したことに伴い、旧市街地を保存しながら郊外に副都心や住宅をつくっていくという拡大戦略を採用した。しかし、それでは環境が悪化し、都市のアイデンティティも失われるという声が大きくなり、旧市街地の再生によるコンパクトなまちづくりへと方針を転換する。これも1970年代のことであり、この時期がイタリアの都市やまちづくりにとって大きなターニングポイントになっている。

**\*3 ベネチア**

イタリア北部、ベネト州の州都。アドリア海の「潟（ラグーナ）」の上に建設された都市で「水の都」と呼ばれる。英語ではベニス。ベニスは、117の小さな島を400の橋で結び、リオと呼ばれる大小150の運河が巡っており、水上バスが主要な交通機関となっている。9世紀の初めには現在の都市の骨格が誕生している。

**\*4 ボローニヤ**

イタリア北部、エミリオ・ロマーニャ州の都市。古くから交通の要所として栄え、11世紀には世界最古の大学の1つといわれる「ボローニヤ大学」の成立によって、当時の文化、学問の中心地として、ヨーロッパ全土から学生が集まり、繁栄を遂げた。



16世紀のベネチアの鳥瞰図



魅力ある水辺空間、ベネチアの大運河

